

WASEDA UNIVERSITY ALUMNI ASSOCIATION of JAPAN and TAIWAN

# 日台稲門会 会報 第14号



発行所：日台稲門会事務局  
神奈川県茅ヶ崎市南湖5-15-5(小野間方)  
TEL・FAX0467(83)2611  
編集委員会  
発行人：岩永 康久  
編集責任者：齋藤 晃

## 会長挨拶 東日本大震災で感じた 台湾の同胞愛



日台稲門会会長 岩永 康久

今回の大地震・津波・原発事故により多大な被害を被られた皆様に対し、心よりお見舞い申し上げます。会員の皆様におかれましても災禍が及んだご親族がおられるのではないかと心配しております。史上例を見ない想像を絶する被害に日本国民ばかりでなく世界各国よりいろいろな協力の手を差し伸べていただいている事に感謝の念で一杯です。早稲田大学としても義捐金活動を推進しており、日台稲門会と致しまして、大学経由一〇万円円の寄付をさせていただきました(各個人献金とは別に)。

さて今回ここで特に強調したいのは、台湾からの「同胞愛」とも言える心温まる反応です。

地震・津波直後、公式には馬英九総統からもお見舞いのメッセージが届き、即救援隊二八名が派遣されました。李登輝元総統からも痛恨の思いを込めた以下メッセージが有りました。

「日本の皆様の不安や焦り、悲しみなどを思い、私は刃物で切り裂かれるような心の痛みを感じております。人間には力の及ばない大自然の猛威の前に、畏敬の念を抱いても、決して「運命だ!」とあきらめないでください! 自信と勇気を奮い起こしてください! 今は、一刻も早く地震の余波が収まることと復旧を、遠い台湾の空の下でお祈りしております」と。

個人的にも頼浩敏・司法院長、彭榮次・亞東關係協會會長、羅坤燦・駐日代表處副代表等よりお気遣いの電話やメールを頂きました。他に台湾で一緒に仕事をした仲間、駐在時に知りあつた多くの友人からも暖かいメッセージをいただきました。しかしもつとも心を打たれたのはネット・動画などを通して台湾の子供・学生達や一般の多くの人々が自分のことのように心配し励ましのメッセージを送ってくれた事です。日本のメディアでは余り大きく報道されておらず残念ですが、他の国々の反応とはちよつと違つた、寧ろ肉親を心より想いやる温もりに満ちた内容・雰囲気でした。民放数社の義捐金を募るチャリティショーは三月十八日に四時間にわたつて放映され、生放送中に二十二億円もの寄付がなされました。

義捐金はその後も続いており、四月末現在百六十億円にも昇っています。世界各国別の金額は公表されておらず不明ですが、台湾の義捐金は米国と並び最大の規模と言われています。人口二三〇〇万人と一見小さな台湾(それでも世界で四十七位)からこの金額です。又この義捐金の九十二%が民間の寄付に支えられている事です。小生も三月二十四日〜二十七日の間台北に行きましたが、ハイヤーの運転手から以下の様な言葉を聞きました。

「今回の日本の被災は他人事ではない自分の家族に及んだ災害に思えた。我々台湾人にとって日本は特別! 自分はお金はないけれど一万元(約三万円)を寄付しました」と。

一般庶民の貨幣価値からすれば十万円に相当する額でしょう。話を聞いていて、有難く思わず涙を流してしまいました。このような日台の関係は如何にして培われたのだろうかと今更ながら考えさせられました。もちろん日台双方の先人の方々のご努力に感謝しなければなりません。加えてこの関係を維持・発展させて行く事が如何に重要か、我々の日台稲門会活動もながしかかかると関係作りに貢献しているのではないかと感じ、また今後ともかかる活動を続けていく事の重要性を痛感した次第です。(昭和四十四年・政治経済学部卒業)

# 東日本大震災関連(1)

三月十一日に発生した東日本大震災は、東北から関東にかけての広域に大きな被害をもたらしました。被災されたかたがた、ご遺族に心からお見舞いとお悔やみを申し上げます。

この未曾有の災害に対し、日本各地はもろろんのこと、世界各地からたくさんの方々が支援を頂きました。特に巻頭言の会長挨拶「東日本大震災で感じた台湾の同胞愛」にも述べられているとおり、台湾からの物心両面の支援は半端ではありませんでした。

その内容をご紹介するとともに、当会からの義捐金や母校および校友会の取り組みについてご案内いたします。

## 一・台湾からの支援状況(交流協会HPより転載)

なお、最新の情報は右HP (<http://www.koryu.or.jp/>) で閲覧できます。

## 交流協会

### ◆台湾からの支援(東日本大震災)

2011年3月28日作成  
2011年5月2日更新

十一日に発生した東日本大震災では、

発生した当日から、馬英九総統をはじめ台湾各界より暖かいお見舞いのメッセージが届くと同時に、人的、物的、資金的支援の申し出がありました。また、現在も左記にありますとおり台湾の各界からの義捐金の申し出が届いており総額一六〇億円を超えております。このような支援に対する菅直人総理からの感謝のメッセージは、台湾各紙を通じ台湾の方々に謝意が伝達されています。また、今井・当協会台北事務所代表、草野・日本人会理事長及び岸本・台北市日本工商会理事長が台北にて記者会見を行い在台湾の日本人社会からの台湾への感謝の意を伝達しています。また、当協会は、台湾の在外事務所において義捐金を受け付ける他台湾からの支援物資を被災地に送付するための側面的な支援をさせていただいておりますが、台湾からの支援物資を受領した被災地の方からも台湾への感謝の言葉を頂いております。

## 台湾からの支援概要

### 1. 人的支援

◎台湾各地の消防士からなる台湾救援隊(二十八名)の派遣(三月十四〜十九日)

十五日、宮城県に入り、一六〜十七日、現地にて捜索活動、十九日、離日。  
なお、救援隊には駐日台北経済文化代表事務所職員一名、交流協会本部職員一名が同行。

◎その他、台湾NGOが被災地にて救援物資の提供等の活動している。

四月十日の読売新聞朝刊に掲載された、馮寄台・台北駐日経済文化代表処代表の日本国民に対する激励文を紹介します。

## 人の苦しみは我が身のこと

台北駐日経済文化代表処  
代表 馮 寄 台

1999年の台湾中部大地震、2009年の台湾南部大水害で甚大な被害が出た時、日本は救援隊派遣や物資提供などで支援の手を差し伸べ、台湾の復興を応援してくれた。われわれはこれを今でも忘れていない。台湾の人々は日本の被災に、言いよつのない悲しみを覚えている。人々は花やカードを手にも日本の交流協会台北事務所を慰問に訪れ、小学生はコンビニの募金箱におこづかいを入れ、年配者が手にあるだけの現金を持って外交部に「日本を助けたい」と申し出た。これまで集まった義援金は約110億円になる。日本の復興にはわずかもかもしれないが、これは台湾人の日本に対する心からの声援だ。  
台湾人が最も好きな国は日本であり、最も信頼し、一番旅行に行きたいのも日本である。  
われわれは今回の震災で日本が受けた痛みを深く身にしみて感じ、馬英九総統から小学生までが「人飢己飢、人溺己溺(人の苦しみを我が身のことのように)」の精神で日本のために祈り、声援を送っている。  
日本、加油(ジアヨウ)(頑張れ)!

祝 早稲田大学校友会日台稲門会  
会報第14号 発刊

中華民國 台北駐日經濟文化代表處  
代表 馮 寄 台

東京都港区白金台5-20-2  
電話 03(3280)7811

2. 物的支援

総量約五六〇トン(台湾外交部発表)の支援物資の提供(台湾外交部が官民より集荷した支援物資を駐日台北経済文化代表事務所が順次被災地に送付)

(1) 宮城県に対する供与

- ・三月十六日送付分:①発電機二九二台、②毛布五〇箱、③寝袋五〇箱
- ④スリーピングマット五、⑤保温ジャケット九一〇箱、⑥防寒着二〇〇着

- ・三月十九日送付分:①毛布五九五箱、②寝袋四四一箱
- ・三月二十五日送付分:①食品八・八トン

(2) 福島県に対する供与

- ・三月二〇日送付分:①カイロ一五〇箱、②毛布八〇箱、③寝袋八二七箱
- ④防寒衣三十一箱、⑤食品一トン、⑥発電機二〇台、⑦石油ストーブ三〇〇台。

(3) 岩手県に対する供与

- ・三月二十二日送付分:①発電機二七八台、②石油ストーブ六〇〇台、③食品五・七トン
- ・三月二十五日送付分:①寝袋二七一箱、②スリーピングマット一八六箱
- ③セーター四十一箱、④マスク五十四箱、⑤衣服七〇箱、⑥ジャケット二二四箱、⑦オーバーコート一五五箱

(4) 各地被災地・避難所への供与(三月二十八日~四月十四日)

- 毛布八七四箱、缶詰七二二箱、衣服一〇六七箱、クッキー四五九〇箱、飲料六六三箱、インスタントラーメン二〇六七箱、食料品一八一箱、発電機九八台、手袋四二箱、暖房器具五三台、マスク三五〇箱、マットレス三三箱、粉ミルク八九五箱、マフラー二二箱、ナプキン一〇箱、枕一六箱、ポップコーン一五四箱、キルト四〇八箱、米三四一箱、寝袋九八箱、ティッシュ二〇箱、トイレットペーパー二〇箱、懐中電灯三箱、タオル四八箱、水二〇七箱、納体袋二四箱

3. 資金援助

(1) 台湾当局からの資金援助

三月十二日、外交部、一億台湾ドルの資金供与を表明。

(2) 台湾官民の義捐金

(イ) 交流協会在外事務所での義捐金受付

三月二十一日より、交流協会台北・高雄事務所において義捐金を受付開始。四月二十五日現在、約八・一億円(詳細は台北、高雄事務所ホームページ参照)

(ロ) 台湾官民からの義捐金

外交部によると、外交部等の機関と民間団体を合わせた義捐金は、四月二十五日現在、五十五億四千八百四十七万台湾ドル(≒一六〇・〇億円:一台湾ドル≒一・九円で換算)。

二. 当会からの義捐金

四月の幹事会にて二〇一一年度予算として、東日本大震災への義捐金一〇万円を決定し、「早稲田大学校友会東北地方太平洋沖地震救援金」を通じ寄付を行いました。

三. 東北地方太平洋沖地震に関する母校ならびに校友会の取組みについて

三月二十四日、登録稲門会に対し早稲田大学校友会より以下の要請がありました。会員・会友各位は、いろいろな機関を通じ寄付をされていることと思いますが、ご協力をお願いする次第です。

『このたびの地震で被災された皆様には心よりお見舞い申し上げます。』

同窓会組織である早稲田大学校友会は、母校早稲田大学と協同し、被災地の復興支援・学生支援・校友支援を行ってまいります。お一人でも多くの校友の皆様に取り組みへのご協力を賜りたく、お願いとご案内を申し上げます。詳細はHPまたは十二ページの掲載記事にてご確認をお願いします。

◆東北地方太平洋沖地震義援金・救援金について

http://www.waseda.jp/jp/news10/110323\_do.html

以上

注:募集期間二〇一一年三月二十二日~九月三〇日(予定)

日本と台湾の懸け橋を目指す

石川台湾問題研究所

代表 石川 公弘(昭和34年商研卒)

〒242-0029 大和市上草柳6-12-13

Tel 046-261-1838 Fax 046-208-2012

Yahoo! ブログ - 台湾春秋 発信中

http://blogs.yahoo.co.jp/kim123hiro/MYBLOG/yblog.html

日本李登輝友の会神奈川県支部長

高座日台交流の会事務局長

早大日台稲門会顧問

講演会採録  
「転換期の東アジアと台湾の行方」



熱弁を奮う林氏

本年二月五日(土曜日)、早稲田大学の早稲田キャンパスに、NHK解説委員 林純一氏をお招きし、講演会を開催致しました。本号に、改めて抄約を掲載することとします。なお当日林氏から、「本日本話しする内容は、NHK解説委員ではなく、林個人としてお話しします」旨の注意があったことを特に付します。(採録：広報担当・齋藤寛)

※ ※

東アジアは、中国の台頭で大きな歴史の岐路にさしかかっています。中国が、その軍事力や経済力を背景に「東アジアの盟主」と言う地位を手にするようになるのか。それとも、アメリカが日本を始めとする同盟国との連携で東アジアにおける影響力・指導力を維持するのか。

東アジアで始まった米中のせめぎ合い、そのカギを握るのが台湾です。

1、「米中関係の現状をどう見るか」

●米中首脳会談

米中首脳会談は、基本的に成功でした。①表面上ではあるが、関係修復を取り繕い、②アメリカは中国に450億ドルの米製品を買わせ、③中国は、国賓待遇を実現させることにより、胡錦濤主席の威信を示すことができました。

前回2006年の訪米(フツシユ政権では国賓待遇は認められず、ホワイトハウスの歓迎式典では国歌演奏の際に中華民国(Republic of China)国歌と紹介され散々でした)

来秋総書記の任期が切れる胡錦濤主席はレイムダック化しており、これに歯止めをかけ、習近平氏にその座を譲った後も影響力を保持するためには、国内向けに威信を示す必要があったのです。

一方で、米中が本質的問題では互いに相容れない存在であることを鮮明にした首脳会談でもありました。胡錦濤主席は、「米中は、それぞれが選択した発展の道と核心的な利益を相互に尊重すべき。」と発言しましたが、オバマ大統領は同意しませんでした。胡錦濤主席が、言わんとするところは、中国型の経済発展方式や台湾・チベット問題にアメリカは口を出すなと言つこととす。アメリカが吞めるはずはありません。

●中国の経済発展がもたらしたものの

中国は、世界的な金融危機からいち早く脱出したことで、欧米型の経済発展モデルに対する、自国の発展モデルの優位性を強

く意識するようになりました。

「欧米型発展モデル」は市場を重視し、自由や民主主義にその基盤を置きます。

これに対し市場や企業の活動に国家が徹底的に介入・主導するのが、中国型の発展モデルです。

「国家資本主義」とか「独裁資本主義」と揶揄されています。ポール・クルーグマンは、中国を「ならず者経済大国」と呼びました。とは言え、現時点で見ると、中国型モデルは成功し、共産党の執政に正当性を与えています。

ただし、そのことが、中国の民主化・自由化の遅れを招き、途上国が中国型発展モデルを真似れば、世界の民主主義の危機にも繋がってくる懸念があります。

●中国はどう変わったか

最大の変化は、中国の対外姿勢。この一年で一段と高圧的になりました。

最近の中国は、①尖閣諸島沖での漁船の衝突事件への対応、②南シナ海を「中国の核心的利益」と表明、③劉暁波のノーベル平和賞受賞への対応、④北朝鮮問題への対応、などに見られるように、国際社会との協調性を欠くようになっていきました。

中国が自己主張を強め、国際社会の批判を気にしなくなった背景には、経済発展がもたらした自信とそれに伴う民族意識の高揚があり、民族意識の高揚は、軍を中心とする強硬派の発言力を強めました。

また、国際社会に「大国の責任を果たさないことへの失望」、「人民解放軍が、文民統制されていない」と言う懸念を生みだしています。

●米の対中姿勢

その結果、アメリカ・オバマ政権の対中姿勢も明らかに転換しました。オバマ政権は発足当初「21世紀を米中新時代」と位置づけました。G2と言う言葉も生まれませんでした。しかし、「中国はアメリカの権益に挑戦する存在、アメリカが主導する世界秩序の脅威となりつつある。」

オバマ政権は、こうした警戒感を強めつつあるようです。

●米中対立の本質は、東アジアの覇権争い

中国にはアメリカに代わって、世界のリーダーになる意志はありません。中国の狙いは、東アジアに東アジア共同体ならぬ中華共同体を作りだすことだと思えます。すでに周辺国(北朝鮮、ミャンマー、カンボジア)の衛星国化や黄海・南シナ海・東シナ海の支配強化を目指す動きとなって表れています。中華共同体の実現には、この地域からアメリカの影響力を排除することが不可欠です。人民解放軍が進める軍備の近代化は、そのための手段です。

一方、アメリカにとっては、世界の成長センターである東アジアで、引き続き経済や安全保障面での主導権を維持することが国益です。

アメリカは周辺国との連携で中国包囲網を形成し、中国の膨張阻止を狙います。①クリントン国務長官の「南シナ海の航行の自由は、アメリカの国益」発言、②中国の表玄関、黄海での米韓合同演習実施③空母ジョージ・ワシントンを派遣し、ベトナムと初の合同訓練、④オバマ大統領のインド、

インドネシア訪問、⑤クリントン國務長官の「尖閣は、日米安保の対象」発言、⑥ダーツ国防長官の「米軍のプレゼンスを北東アジアで維持し、東南アジアで強化する」発言、これらはその意思表示です。

経済の相互依存関係がある以上、米中間係はかつての米ソ関係にはならないでしょう。しかし、オバマ政権の姿勢の転換はいわゆるヘッジ戦略(万に備える)の比重を高めること以上の変化だと思えます。

## 2. 「米中せめぎ合いの中の台湾」

### ●中国にとつての台湾の意味

中国にとつて、台湾を取り込むことは、①国家の統一を最終的に実現し、屈辱の歴史(アヘン戦争に始まる列強による蚕食と侵略)に終止符を打つと言つ、精神的・象徴的な意味を持ちます。

「屈辱の歴史に終止符を打ち、中華民族の偉大なる復興を果たす。」(江沢民)

同時に②南シナ海、東シナ海の支配権を確立するための戦略的価値があります。

### ●アメリカにとつての台湾の意味

「日本・東南アジアにとつて台湾は、中国から身を守るbuffer、緩衝材。」(宋楚瑜・台湾政治家)

「Taiwan is an American outpost in front of china。」(米政府高官)

つまり、台湾統一は、中国にとつて中華

共同体を作り出す上で、不可欠だし、一方のアメリカにとつては、東アジア戦略に決定的なダメージとなります。

### ●中国の台湾統一戦略

馬英九政権の登場で、中台関係は劇的に転換しました。

背景には、①「一つの中国」という対話の土俵が復活したこと、②中国の平和攻勢即ち台湾への対応がソフトで洗練されたものになったこと、があげられます。(昨年は日本人を遙かに凌駕する160万人の中国人観光客が訪台)

「台湾住民の利益のために、中国は譲歩を厭わない。」(温家宝首相)

中国の狙いは、経済関係を緊密化し、台湾の経済の中国依存度を高めることにあります。それによつて「中国との統一も悪いことではない」という世論をつくりだし、その上で、経済に限定している対話を政治・軍事問題へと拡大、最終的に統一を対話のテーブルに乗せることにあります。

しかし、今のところこれは成功していません。台湾国内の世論調査によれば、統一に賛成は10%未満減少傾向にあります。今急速に増えているのが、「永遠に現状維持を希望」と言う世論です。中国が大国化する中で、独立は難しくなりつつあるが、統一は絶対嫌だと言う民意が、台湾の主流になりつつあるように見えます。

### ●馬英九政権の対中戦略

馬英九総統は、中国との統一を望んでいるわけではありません。中国の戦略も承知

しています。

中国は、経済と言う餌を付けた統一の罠を台湾にしかけました。罠にかからずに、何とか餌だけ取るうとしてるのが馬英九政権です。そのために欠かせないのが日米の後ろ盾です。日米の後ろ盾が弱まれば、台湾は中国になびいていかざるを得なくなるでしょう。

### ●台湾の国際的地位

さて、台湾の行方を考える上で、出発点となるのが台湾の国際的地位の問題です。中国は、一貫して第2次大戦後、台湾は中国に返還されたと主張しています。根拠としているのが1943年のカイロ宣言です。国民党の立場も同様です。

これに対し、アメリカは「第1次大戦後台湾の地位は未定であり、国際的に解決されるべき問題」と言う立場に立ちます。サンフランシスコ講和条約がその根拠です。民進党もこの立場です。

そうした中で、日本政府は、「台湾の帰属については、言うべき立場にない」という公式見解をとっています。

ここで重要なのは、日本も台湾の中国への帰属を認めていないと言う点です。

米・英・中華民国3カ国の首脳の間合意とされながら、調印された文書も存在しないカイロ宣言と台湾の統治者だった日本を含む49カ国が調印したサンフランシスコ講和条約とは、どちらに優位性があるかと言えば、明らかに後者です。つまり、台湾問題の本質は、国共内戦の延長線上にあるのではなく、第2次大戦の戦後処理がまだ終わっていない所にあるのです。とは言

え、国際的な世論工作では、中国が圧倒的に優勢です。中国はあらゆる機会を捉え、「台湾は、中国の不可分の領土の一部」とあると強調し、既成事実化させようとしています。台湾も馬英九政権の登場以来、同様の世論工作を強めています。「日華平和条約の署名により台湾は、正式に日本から中華民国に返還された。」と言った馬英九総統の歴史改竄発言もこのところ目につきます。台湾の将来は、一義的に台湾住民が決めるべき問題です。しかし、台湾海峡の自由航行の問題がある以上、国際社会が積極的に関わるべき問題でもあるのです。

### ●2012年総統選挙の意味

これは「一つの中国」の立場に立つ国民党と「一つの中国」を否定する民進党の戦いです。

馬英九氏再選のカギは、中国に呑み込まれない方策を具体的に示すことできるか、民進党政権奪還のカギは、民進党でも中国と対話できること示すことができるか、でしょう。(中国との経済関係は、もはや後戻りできない。)

選挙の結果は東アジアにおける米中のせめぎ合いに大きな影響を及ぼすこととなります。

—— 林 純一氏プロフィール ——

・1949年生まれ ・72年 上智大学卒業  
NHK入局 ・83年より報道局国際部記者  
・93-96年 香港支局長 ・98年 2002年 台北支局長 ・02-09年 解説委員室解説主幹 ・09年 定年退職 以後 専門解説委員としてNHK勤務

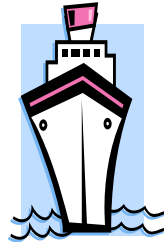
# 会員寄稿

## バシー海峡を守れ

大山 高明

経済優先と推測される台・中融和路線により「台湾海峡波高し」という言葉も何処か色褪せているような感がある。同時に、冷戦構造の崩壊以降、世界の潮流は台湾と中国の軋轢を矮小化するような勢いで混迷を深めている。現在、北アフリカ、アラブ諸国で起こっている民主化運動はインターネットにより世界に伝播しているが、中国では情報の統制に躍起になっている。一方、日本は比較的平和であるものの国内政治は混迷しており、国境海域でも種々の問題が起きている。特に尖閣諸島海域では中国漁船が日本の海上保安庁の船に体当たりを行い、そのビデオが保安庁職員によって放映公開され国民の大きな関心を集めた。尖閣諸島が日本の領土であると宣言している以上、それに対する実効支配が必要であろう。しかし、周辺漁業の流通にしても、また今後周辺海底の資源を活用するにしても九州本土から900キロというのは物理的に遠すぎるというのが現実だ。そこで日本としては尖閣諸島から約190キロという台湾を共同基地として尖閣諸島の産業投資・開発を行うのも一つの解決策

ではないかという考えもある。確かにそのような戦術により中国を牽制しつつ、台湾が第二のチベットにならないよう、三国の関係に更なる緊張をもたらさず戦略も素人目には可能性があると思える。南シナ海のフィリッピンと台湾の間にあるバシー海峡の運航は日本にとってエネルギー運搬の最重要航路である。その生命線を守る為にも「台湾海峡波高し」という緊張状態がここ当面は必要なのではないだろうか。(昭和四十三年・商学部卒業)



## 北海道で感じた 早稲田と台湾のつながり

井上 浩

札幌赴任となって、9ヶ月。3月に思いもよらない大地震の発生。台湾駐在時代に一緒に仕事をした台湾証券取引所や金融監督管理委員会の方々から、私や妻に対して、安否を気遣う電話やメールを頂き、非常にうれしく思った。

楽しみにしていたプロ野球の開幕も延期されたが、各地でチャリティ試合が開催されている。4月3日、札幌ドーム。4月に入ったというのに外では雪が舞う中、北海道日本ハム対東北楽天戦には、多くのファンが集まった。

この日は、日本ハムのゴールデンルー

キー・斎藤佑樹投手の札幌ドームでの2回目の初登板である。斎藤投手は、ご存知のとおり、早大野球部100代目主将であり、昨年、早大野球部を大学日本一に導き、ドラフト1位で日本ハムに指名された。

ここで、思い出したのが、私が広島で勤務していた3年前。早大野球部が台湾遠征を行い、その翌週には、広島球場で雨の中の力投。台北での大歓迎に加え、広島稲門会でも歓迎レセプションを開き非常に盛り上がった。

今度は、私がちょうど札幌勤務となったときに、北海道を本拠地にする日本ハムに入団。当然、これからの北の大地での活躍を期待している。

しかし、3月21日、札幌ドーム初登板となった阪神との試合では、残念ながら3回9失点と散々な内容で降板。この日、2回目の先発マウンドの初回も、いきなり連打され、3失点。「ああ、またか」と先月21日の悪夢がよぎったが、今日は、違った。2回以降は5回まで0点に抑え、日本ハムが台湾出身・陽岱鋼選手の同点打で追いつき、その後、逆転。斎藤投手は、勝ち投手になった。

今日の試合は、早稲田出身の斎藤投手が投げ、台湾出身の陽選手が打って勝利に導く。まさに、早稲田と台湾のつながりの良さを象徴するような試合。

どこにいても、早稲田と台湾のつながりを、ずっと大切にしたいと改めて思った1日であった。二人の選手に感謝。(昭和六二年・法学部卒業)



## 日本語教育と進学指導の JET

- 大学院進学コース ●大学進学コース
- 日本語コース ●短期コース

### 学校法人 JET 日本語学校

理事長 金 美齡 (昭和46年文研博士単位終了 元早大講師)  
校長 井上靖夫 (昭和60年一文卒 早大大学院講師)

東京都北区滝野川7-8-9 TEL.03-3916-2101

Email: [info@jet.ac.jp](mailto:info@jet.ac.jp) Homepage: <http://jet.ac.jp/>

# 台湾での旧友との再会

山下 晋一

私は2010年5月末まで約2年間、台湾にお世話になりました。私が台湾赴任の際に事前に読んで行った方がよいとアドバイスを受けた本があります。この本が私と台湾を密接に結びつけてくれました。その本というのは司馬遼太郎さんの「街道を往く第四〇巻台湾紀行」です。「台湾紀行」は司馬遼太郎さんご自身が老台北（蔡焜燦氏）の案内の下で、台湾を紀行し、台湾の歴史、風土、文化を記した本です。中文にも訳され、台湾の歴史の空白を埋めた本とも言われているようです。嘉南大圳開発を成し遂げた八田與一もこの本で知りました。この「台湾紀行」に実は私の古くからの旧友が多数登場しております。私が最も好きな小説は司馬遼太郎さんの「坂の上の雲」で、学生時代より繰り返し読んでおりました。ご存知の通り、この小説には秋山好古、秋山真之を始め数多くの明治の群像が登場しています。

この群像の中に、私の親友第4代台湾総督の児玉源太郎がいます。その他にも第7代・明石元二郎、初代・樺山資紀、第2代・桂太郎、第3代・乃木希典等が登場します。

台湾に赴任してまもなくNNAの井上山美さんが企画し、片倉佳史さんが案内

された日本統治時代の史跡探訪に参加し、児玉源太郎をはじめ旧友たちの台湾での活躍ぶりを直接知ることができました。


その後、台湾国立博物館に後藤新平と一緒にいる児玉源太郎（どちらも銅像ですが）に挨拶にも行きました。


老台北、蔡焜燦さんに直接お会いしたいと思っていた中で、産経新聞の長谷川支局長のご紹介により実現することができました。蔡さんは「僕は親日ではないよ。愛日だよ。」とお話しされ、お会いした際に口頭試問を受けました。「好きな本は何？」「坂の上の雲です。」「好きな登場人物は誰？」「児玉源太郎と秋山好古です。」後日お聞きしたところによると、幸いにも合格点をいただいたそうです。その後、親しくお付き合いをさせていただき、蔡さんから明石元二郎の本をいただきました。それまで第7代総督になり、わずか1年あまりで福岡において亡くなった彼がなぜ亡骸を台湾に戻し台湾の護国の神になると遺言していたのかが謎でした。いただいた本を読み、台湾統治のために北白川親王が出兵した際に明石が同行し、親王が台湾で薨去された際に付き添っていた事実を知り、その謎が解きました。お礼の電話を蔡さんにしましたところ、大変喜ばれていました。蔡さんご夫妻には帰国が決まった際に送別会をしていただき、司馬遼太郎さんご夫妻との親密な交際ぶりをお聞きし、大変良い


思い出となりました。また帰国前日に李登輝元総統の出身地三芝郷を訪ね、福音山基督教墓地にある明石元二郎のお墓を探し、お参りをしたこともよき思い出です。蔡焜燦さんをはじめとする台湾で知り合った方々のおかげで素晴らしい台湾での生活を送ることができました。台湾に赴任するまでは台湾のことを何も知らず、中国の一部といった誤った認識しかなかった私が、2年間で愛台湾的日本人になってしまいました。これからもライフワークとして、日本で正しい台湾情報を発信しつつ、日台交流のお手伝いをしていきたいと考えております。(昭和五十四年商学部卒業)



**美味しいパスタとコーヒーで、皆様のお越しをお待ちしております！**

**<プロント 越谷レイクタウン店>**   
 〒343-0826 埼玉県越谷市東町4-21-1 イオンレイクタウンKAZE G201  
 TEL:048-934-3201 最寄り駅:越谷レイクタウン駅  
 営業時間:平日、土、日、祝日 カフェ 9:00~17:00 パー 17:00~23:00 定休日:無休

**<プロント 大手町カンファレンスセンター店>**   
 〒100-0004 東京都千代田区大手町1-3-2 大手町カンファレンスセンターB1F  
 TEL:03-6212-0036 最寄り駅:大手町駅  
 営業時間:平日 カフェ 7:00~17:00 パー 17:00~23:00 土カフェ 8:00~17:00 定休日:日祝

**<プロント カレッタ汐留店>**   
 〒105-0021 東京都港区東新橋1-8-2 カレッタ汐留B2F  
 TEL:03-5537-2344 最寄り駅:汐留駅、新橋駅  
 営業時間:平日 カフェ 7:00~17:30 パー 17:30~23:00 土 カフェ 10:00~17:30  
 パー 17:30~22:00 日、祝日 カフェ 10:00~18:00 定休日:不定休

# 岩永台湾講座生台湾研修

今回の研修旅行は小生が早稲田で講座を始めてから三回目になります。二月十三日〜十八日のスケジュールにて、十五名の学生を連れて行ってきました。今年度の学生はタフなものが多く、夜中まで話し込んでいるにも拘らず昼間は居眠りもせず熱心に話を聞き、質疑応答にも積極的に臨んでいました。最近の学生は軟弱だと言われますが、正にその反対の集団で頼もしかったです。研修ではいろいろな角度から台湾の政治・経済が見られるように、配慮しました。スケジュールは以下通りでしたが、訪問・面談においては貴重な話が多く、個別に詳細を記載したい所ですが、紙面上の制約があり、トピックスのみ後述する事とし、添付写真・以下研修行程より類推下さい。

李元総統は過去二回の岩永塾生(生徒がつけた俗称)の訪問が気に入られ、事前に十分時間を確保していただきました。直前に肺炎を患っておられたせいか、お会いした時はお疲れの様子でしたが、講演(演題は「台湾の主体性の確立について」(九ページに掲載)が進み、学生からいろいろな質問が出るにつれ、顔色も良くなり、九〇歳とは思えない熱のこもった講演をいただきました。結局面談は2時間半に及び、別際に「岩永塾生との面談は楽しい」とのお言葉をいただきました。学生達も偉大な政治家の話に強い感銘を受けた様子でした。

食の面では、二三六(日本の経団連に相

当)招待の夕食会(国賓大飯店VIPルーム)での馳走に学生は驚き、台北稲門会招待の夕食会では諸先輩と一緒に打ち解けて盛り上がりました(詳細は台北稲門会HPに参照ください)。一方、亜東関係協会彭榮次会長は夜更かしの学生が眠くならないように「茶話会」形式にしようとの配慮をいただき、会場は外交部ではなく、福華大飯店に設営いただき、高度な内容にも関わらず質疑応答も弾みましました。総統府、二二八纪念馆を案内してくれた蕭錦文氏は酒井充子監督の「台湾人生」にも登場されている方で、実体験に基づき真に迫る話を聞かせていただきました。二二八纪念馆は工事中で休館中にも拘らず特別に我々のみ入館させてくれました。総統府ではアポ無し急な訪問にも拘わらず李諮詢委員が閣議室で応対してくれ、日台若者交流の重要性を強調され、来年は事前に長時間のアポイントを入れ再訪してほしいとの事でした。

自由時報新聞社訪問では呉阿明会長が昼食を交え長時間質疑応答に対応され、翌日の新聞にも載せていただきました。高雄・台南・NEC訪問では台湾産業のダイナミックな活動を目の当たりにし、台湾経済の先進性を認識出来たようです。学生の中には日本の戦後教育の中で加害者意識を持ち続けていた者もあり、いろいろ考える事が多かったようです。比較的高齢な方ばかりでなく、台湾大学学生との討論会・夕食会を通じて若者も非常に親密的で、中・韓の歴史批判とは違わう、客観的事実に基づく台湾の肯定的歴史観がある事を自分の目で確かめる事ができたようです。(岩永記)



①李元総統との質疑応答



②左隣の郭盛淇三三会秘書長、右隣黄章富同副秘書長

## 二〇一一年 二月 岩永台湾講座台湾研修行程

- 十三日(日) 15:30 成田発 18:35 台北桃園着 (CX-451)
- 十四日(月) 市内観光 故宮博物院、忠烈祠、101、龍山寺、中正紀念堂
- 夕食 三三会(郭盛淇秘書長、黄副秘書長、中國信託銀行王副總經理) 國賓大飯店
- 十五日(火) 9:00~12:30 總統府、二二八纪念馆(蕭錦文氏)台湾人生出演)の案内 10:00~10:30 總統府(李嘉進國家安全會議諮詢委員)との面談 14:00~15:40 亞東關係協會彭榮次會長 16:00~ 夕食 福華大飯店 台湾大學学生との討論会その後懇親会
- 十六日(水) 9:00~10:30 NEC台湾(大和社長) 11:00~昼食 14:00 自由時報(呉阿明會長) 15:00~17:30 李登輝元總統 19:00 夕食 台北稲門會 樺慶四川菜餐廳
- 十七日(木) 7:30 台北駅発新幹線(にて高雄) (9:06着) 10:00~11:45 中鋼(CSC) (李慶超副總經理) 15:00~17:30 台南科學工業園(林管理局副局長) + 頂正科技(中村副總經理)
- 十八日(金) 12:45 台北桃園 17:00 成田帰国 (CX-450)



「岩永台湾講座生台湾研修における李登輝元総統講演録(研修内容詳細についてはP.8参照)」  
**台湾の主体性の確立について**

二〇一一年二月十六日  
 李 登輝

一、はじめに

早稲田大学の岩永康久先生をはじめ、岩永ゼミの皆さん、こんにちは！皆様の台湾訪問を心より歓迎いたします。

さて、若い皆さんを前にして、何を話しようかと考えておりましたが、折角台湾に来られたのですから、台湾の実情をお話し、その中でも特に、今台湾が必死に努力していること、即ち「台湾の主体性の確立」について述べようと思います。現在に於ける日本の政情も、やはり強い主体性を求めているのではないかと思います。日台共に日本精神を更に發揮して、「私は誰だ」と答えられる考え方が必要だと感じます。

私は台湾に生まれ、台湾で育ち、さらに仕事も台湾でしてきました。私がこの地に抱く深い情は誰も変えることはできません。このため、台湾の人民が長期にわたり、外来政権の蹂躪と圧迫を受けてきた悲しい辛い運命に対し、憤懣やる方ない思いで、いつの日か、台湾人民の尊厳を高めるために尽力したいと常に思っておりました。

その後、幸運にも政府の仕事に参予で

き、更には十二年間、總統の職を務めることが出来ました。こうした偶然のチャンスを得、台湾に身を捧げる覚悟でいた私は、この間、一体何を考えてきたのか、思考の論理はどんなものだったのか。そして、如何にこれらを実践に移して權威の統治から脱却し、台湾の民主新時代を切り開いたのかなど、總統の任期を終えてから久しい今日、こうした過程について説明をする必要があると思います。このため、本日は皆さんに「台湾主体性の確立について」というテーマの下に、「新時代の台湾人と私の脱古改新」をお話することにしました。皆様のご参考になれば幸甚です。

二、外来政権統治下に於ける「新時代の台湾人」

一九四九年、台湾を統治した外来政権—日本は、第二次世界大戦で敗戦に帰し、台湾の統治権を放棄するよう迫られました。こうして「台湾」は、英米連合軍に参加していた中国国民党により軍事的に占領されることになり、もう一つの外来政権、即ち「中華民国」の統治を受けることになりました。

当時、台湾が置かれた前後の二つの環境とは、「天皇」と「天下は國家のもの」を強調する「日本帝國」、および中国国民党の「天下は党のもの」とする「中華民国」による統治であり、二つの外来政権の交代がこの台湾で行われました。五十年もの間、日本の統治を受けてきた台湾は既に現代化の道を歩み始めていましたが、これが台湾の文明に及ばない新政権

が統治することになったのです。台湾人にとって、これは政治と社会に力学的な作用と影響を及ぼすものであり、二二八事件の発端もまた、こうした二つの異なる文明の衝突にあったのです。

台湾は数百年にわたって外来政権により統治されてきました。一九九六年、台湾では初めて直接選挙による總統が選ばれ、外来政権の統治から脱却することができました。日本統治時代、台湾語を話す人々は虐げられ、終戦後もそうした状況に変わりはありませんでした。これについて、私は台湾人の悲哀を深く感じていました。我々は自らの道を歩むこともできなければ、自らの運命を切り開くこともできなかったのです。

日本統治時代がそうであった様に、終戦後の国民党政権時代にあってもそれは変わることはありませんでした。

こうした状況の中で、我々の中に「新時代の台湾人とは何か」という新たな問題が生まれました。ここではつきりと知っておかなければならないことは、この時点の「台湾人」は、異民族の奴隷から、同族の奴隷に変わっただけという耐え難い状況にあったということです。即ち、台湾人は日本統治時代には、既に「境界人(marginal man)」の境地に立たされていたのです。その後、「二二八事件」の発生により、台湾人は伝統的な内発的自省を始めるようになり、同時に自分たちが外来政権の人格主体性をなすものではなはいといった考えが形成されていきました。こうした行為と考えを持つようになって

いった台湾人こそ、正に「新時代の台湾人」なのです。

ここからも分かるように、「台湾人」が再び「アイデンティティ」を確立することができたのは、外来政権の統治下にあったからであり、外来政権が台湾人の「独立した台湾人」という絶対意識を掻き立てたのです。

当時、二つの外来政権の狭間に置かれた状況は、自己認識の形成に極めて大きな影響を及ぼしました。こうした状況は、自らが置かれた二つの生命の形態、二つの世界、二つの時代の境界線に在ることへの意識を持つと同時に、自らを超越論的な遠近法のもう一つの座標に置くことの意味しているのです。更に言うならば、これは自らを過去と未来を繋ぐ一環であるとはつきり認められたものなのです。過去を未来に持ち込む者を「旧派」と呼び、未来を過去から救い出す者を「新派」と呼びます。「旧派」は即ち中国国民党の権力のことであり、「境界人(marginal man)」は言うまでもなく、未来を過去から救い出す「新派」の位置を占めています。こうした「新派」は、具体的には「独立した台湾人」が自己本位を形成する時に、「則天去私(天に則り、私を去る)」ではなく、「則私去天(私に則り、天を去る)」の行動規範に従い、自分の内部から自主性の力を求めることを指します。こうした「新時代の台湾人」が持つ「則私去天」の行動規範により生み出される力は、台湾人が台湾の主(あるじ)となることを求め、民主改革を求める集団的な民意であったのです。

三、中国の託古改制

スペインの哲学者一オルテガ・イ・ガセツトは「我々が擁するほとんどの世界の図像は祖先から受け継いだものであり、これらの図像は人々が生活を営む中で確固たる信念として發揮されるのである」と話していますが、この考えに基づくと、中国は数千年の歴史を有している訳です。から進歩した文明国であるはずですが、しかし、事實はそうではありません。

中国の歴史は黄帝以降の夏・殷・周から明、清に至るまで、脈々と同じ流れを受け継いできた大中華帝国体制でした。この体制は「中国の法統」であると考えられています。この法統の外にある者は、即ち化外の民であり、夷狄（東方と北方の蛮族）の邦なのです。

このため、中国人の特徴は「一つの中国」という概念、即ち五千年の歴史を持つ中国は「一つの中国」の歴史なのです。中華民国も中華人民共和国も中国五千年の歴史の延長線上にあり、中国はただ進歩と後退を絶えず繰り返している政体なのです。このため、ヨーロッパの人々が中国を例に挙げて打ち出した「アジア式の発展停滞」という説も、実は一理あるのです。

孫文先生が築いた「中華民国」は、理想を持った新しい国家の組織体系でしたが、残念ながら政局の混乱により建設が行われず、基本的には「中国法統」の政体の延長でした。中華人民共和国の源はソ連の共産党にあります。が、「中国」という土地で国を築いたが故に、中国文化の

束縛から逃れることができません。共産党は既に中国化してしまっています。中国に返還された香港で施行されている「一国二制度」も中国固有の産物です。

ここで特に強調したいのは、共産革命が中国にもたらしたものは、中国をアジア式の発展的停滞から救うのもでもなければ、中国から逃れるものでもなく、中国の伝統的な覇権主義の復活と誇大妄想の皇帝の再来でしかないということです。

中国五千年の歴史は、常に限られた空間と時間の中に閉鎖されており、各王朝が一つなぎになった連結体に過ぎません。つまり、前の時代の歴史の延長に過ぎないのです。歴代の皇帝は、権力と地位の強固、版図の拡大、財物の搾取に明け暮れ、政治改革を進めようとした者はほとんどいません。中国の歴史上で政治改革と言えるものは、戦国時代の秦国に於ける「商鞅の変法」、宋代の「王安石の変法」、清朝末期の「戊戌の変法」および立憲運動など数えるほどしかなく、しかもいずれも失敗に終わっています。帝王統治を全体的に見た時、各王朝はただ「託古改制」を繰り返していただけに過ぎません。もう少し詳しく見ると、「託古改制」というよりも、むしろ、「託古「不」改制」と言った方が、より真実味を帯びています。

こうした五千年にわたる閉鎖的な帝王政体について、魯迅は次のような見方をしています。「これは目に見えない壁に幽閉された中で、何度も繰り返され上演される芝居であり、古い国の中で螺旋状に前進していくつまらない舞台である」と。

また、中国人の民族性について、魯迅は「中国人は『争乱の首謀』とはならず、『災いの元凶ともならない』。しかも『最初に幸せをつかむこともしない』」。

このため、すべての事に於いて改革を進めることができず、先頭に立って切り開く役割を誰もが担いたがらない」と、より精確且つ細かい見解を述べています。が、この見方は大変適切であると私は思います。

四、私の脱古改新

中国の法統に於ける「託古改制」が、もはや現代の民主化の潮流に受け入れられないことは明らかであり、台湾にとつては特に見直すべき問題でした。そのため私は「脱古改新」を提起し、以てこれに対応すべきであると主張しました。「脱古改新」の目的は「託古改制」の毒を断ち切り、「一つの中国」、「中国の法統」の束縛から抜け出し、台湾を主体性のある民主国家として切り開くことにあります。

台湾が「脱古改新」をするためには、台湾自身の問題と中華人民共和国の問題をそれぞれ分けて処理する必要があります。私が一九八八年に総統に就任した時、台湾は「中国の法統」の根拠地であり、国民党政権は権力を以て台湾を統治していたという状況にありました。こうした背景には継承と革新の混同、保守と開放の対立、台湾と中国の政治実体の矛盾、民主体制と権威体制の選択などの深刻な問題が隠されていました。殊に民主改革

を求めるといふ民衆の声が聞こえていました。これらの問題を抱える範囲は極めて広範でしたが、その病巣はただ一つ。それは台湾の実状に合わない憲法の実施でした。これらの問題を解決するには、憲法の改正から着手する必要があったのです。

当時、私は国民党主席を兼任していましたが、国民党は政治改革に利用できる改革マシンではなくなっていました。保守勢力が阻害の要因となっていました。保守勢力は旧憲法にしがみつき、「法統」で約束された地位を手放そうとせず、民主改革を求める声に耳を傾けようとしなかったのです。しかし、時代の巨大な衝動には太刀打ちできず、保守勢力はどうとう民主の大きな波に打ちのめされました。私は数々の困難に直面してきましたが、最後には全人民の支持を得て、経済の持続的な成長と安定した社会の中で、流血のない「静かな革命」、即ち六回に及ぶ憲法改正を成し遂げました。この中で、憲法改正の主たる目的である「動員戡乱時期」の停止、「動員戡乱時期臨時條款」の廃止、古参中央民意代表の改選、直接選挙による総統の選出などを実現させました。一連の改革により、民主の扉を開いたのみならず、同時に「中華民国在台湾（台湾に於ける中華民国）」を「台湾中華民国」という新しい位置付けにまで推し進め、台湾を主体とする政権を確立しました。即ち、台湾は「一つの中国」から解放される方向にあり、同時に「中国の法統」に終止符を打つ道を歩み始めたのです。

台湾で実施されている中華民国憲法で

は、中国大陸も領土内に含まれています。これは事実をそぐわないものです。その一方で、我々は中国の「一つの中国」や「台湾は中国の一部である」との主張にも同意することはできません。この歴史的な争議を解決するため、私は一九九一年に「動員戡乱時期」の終了を宣言し、国共内戦に終止符を打ちました。双方は互いに政治実体として認め、台湾が台湾本島、澎湖、金門、馬祖を有効的に統轄していることを認め合いました。一九九九年に「ドイツの声」のインタビューの中で、台湾と中国は「特種な国と国との関係」にあると表明し、台湾と中国の関係について明確な境界線を示しました。台湾と中国の関係はつきりすれば、台湾は永遠に安穩でいられるのです。

台湾を主体性のある国にするには、文化の建設が極めて重要です。私は政治改革を進めると同時に教育改革、司法改革、および心の改革を提唱し、中国の文化的色彩の払拭に努め、多方面から台湾の主体性ある文化の建設に取り組み、台湾の国家基盤の強化を図りました。当時、私はこれを「新中原文化」と称しました。

台湾の民主改革の完成、新文化の確立、および中国との関係の明確化は、「託古改制」から「脱古改新」に転ずるプロセスであり、すべての価値の転換を実現させるものでもありません。

五、結び私になにものであるか

台湾に於ける「脱古改新」の歴史的大業の完成は、すべての価値の転換を実現し、台湾を根底から一新させ、民主社会

の新紀元へと突入させました。これは大変喜ばしいことです。しかしながら、このプロセスの中で、私が果たした役割は如何なるものであり、私の思惟の根柢はどこにあったのでしょうか。そして、私はなぜそれを実行したのでしょうか。これについては、詳しく説明する必要があるのでと思います。

私は青年時代に二つの問題について問い続けていました。一つは「死」について、そしてもう一つは「自我」についてです。実際、この二つ問題の関係は弁証的なものです。いわゆる「死」とは肉体的な死亡のみを指すのではなく、観念上の自我の否定も含まれます。

もちろん、「死」とは生命の終わりを意味します。これは自然の一つの過程であり、命の限度の中で自我を実現させ、世界の中に自分の位置付けを探し求めるものです。「死」のもう一つ意義は自我の死亡です。これは超自然的であり、自我を止揚し、存在のレベルを昇華させることです。こうして人は生まれ変わるのです。

マルティン・ハイデッガーはニーチェの研究で記した大著の中で、「ニーチェは生の本質は自己の保存(生存競争)にあるのではなく、自身を超えた境地へ高めることで生の本質を見出すことができる」と考えた。このため、生命の条件として、価値はそのようなものと考えられるべきであり、それは生を高めることを担い、促進し、駆り立てるのである」と述べています。

いわゆる「超人」とは、このようにし

て自分を超越することなのです。ニーチェは著書の「ツァラトゥストラはかく語りき」の中で、『今、心配性の人は往々にして「人は如何にして自己保存できるのか」と問うが、ツァラトゥストラは初めで、そして唯一「人は如何にして超越できるのか」と問うた人である』と言っています。

これまで、ダーウィンの進化論の影響により、生命の最重要課題は自己の保存だと考えられてきました。これについて、ハイデッガーは生を高めることが生の本質であるということと誤解していると解釈しています。この二つの価値が誤って位置付けされているからこそ、我々は新しい価値ですべての価値を見直さなければなりません。

私は命の旅の中で、常に明確な目標意識を持ち、さらにその目標に向かって前進してきましたが、様々な人生体験を経て、私はついに「私ではない私」という人生の正しい意味を悟り、これはまた新時代の台湾人にとっての誠の意義でもありました。実際、この意義は、今日まで私が生命に対して行ってきた弁証を完全に写し出したものなのです。

以上、「台湾主体性の確立について」と言うテーマの下に「新時代の台湾人と私の脱古改新」を私が政治に携わる中で、また人生で体得したさまざまな考えをお話しました。

皆さんのご参考になれば幸いです。ご清聴ありがとうございました。

慶祝 日台稲門会第14号会報発刊

集集電工業股份有限公司

簡 燦 雲

(昭和 20 年 理工学部電気卒)

火泥熔接®  
Volcanit Weld®  
EXOWELD  
鋁熱熔接器材  
接地工程器材  
避雷針設施  
專業製造銷售

台北市師大路93巷18號1樓

公司：電話(02)2364-2200 傳真：(02)2366-1930  
工廠：電話(02)2637-1906 傳真：(02)2637-1907  
統一編號：09411969

# 東日本大震災関連(2)

## 早稲田大学の取組み

登録稲門会ならびに

校友会代議員の皆様へ

二〇一一年四月二五日

早稲田大学校友会

『早稲田大学校友会 東日本大震災  
救援金』の取り組みについて(再依頼)

このたびの地震で被災された皆様には  
心よりお見舞い申し上げます。

さて、三月二四日付けにて下部引用の  
とおり救援金をお願いを差し上げました  
ところ、大変ありがたいことに多くの支  
部・稲門会・校友の方々から、賛同の声  
を寄せていただいております。しかし、  
大学、校友会合わせて三件の窓口がある  
ため、その差異や目的がわかりづらいと  
の指摘も寄せられましたので、再度、  
ご案内申し上げます。

早稲田大学では、①被災地域への義援  
金と②『WASEDAサポーターズ倶楽  
部寄付金』を通じた被災学生の各種支援  
のための支援金を募集しております。(税  
制上の優遇措置あり)

また、校友会では、被災地に多くの校  
友がお住まいであることから、被災学生  
に加えて被災された校友の方々も支援す  
べく、③『早稲田大学校友会東日本大震  
災救援金』を受け付けております。お寄

せいただいた救援金は、大学の行う被災  
学生の各種支援と、校友会が行う校友支  
援に半額ずつ活用させていただきます。  
(税制上の優遇措置なし)

ついでには、寄付金控除等、税制上の優  
遇措置を必要としない、校友会支部・稲  
門会等の皆様は、なにとぞ③『早稲田大  
学校友会東日本大震災救援金』への協  
力を賜りますようお願いいたします。

校友個人の皆様で、税制上の優遇措置  
を希望される場合は、大学の行う②『W  
ASEDAサポーターズ倶楽部寄付金』  
を通じてご協力ください。

①被災地域支援のための義援金口座に  
つきましては、主に教職員・学生を対象  
として開設したのですが、こちらは、  
日本赤十字社へお届けします。

すでに地域稲門会等におかれましては、  
地元自治体等を通じて早々に義援金を送  
金されたとのご報告も多々頂戴しており  
ます。こうした中、重ねてのお願いとな  
り大変恐縮ではございますが、なにとぞ  
よろしくお願い申し上げます。

### 記

#### ◆母校 早稲田大学による取組み(以下 2件)

##### ①『被災地域への義援金』

・説明等:  
賜りました義援金は、日本赤十字社  
へお届けします。

・募集期間:  
二〇一一年三月二四日(木)～七月  
三一日(日)※期間を延長しました

・受付方法詳細HP・問合せ:  
[http://www.waseda.jp/jp/news/10110323\\_d02.html](http://www.waseda.jp/jp/news/10110323_d02.html)

早稲田大学 総務部総務課  
〒169-8050 東京都新宿区戸塚町  
1-104 TEL03-3203-4333 FAX03-  
3203-7051

##### ②『被災した早稲田大学学生(新入生含む) への支援金』

・説明等:  
賜りました支援金は、被災学生の各  
種支援のため活用させていただきます  
す。また、本支援金は「WASEDA  
サポーターズ倶楽部寄付金」を通  
じて受領いたしますので、寄付金控  
除の対象となります。

・募集期間:  
二〇一一年三月二四日(木)～七月  
三一日(日)※期間を延長しました  
・受付方法詳細HP・問合せ:  
[http://www.waseda.jp/jp/news/10110323\\_d01.html](http://www.waseda.jp/jp/news/10110323_d01.html)

早稲田大学 総長室募金課  
〒169-8050 東京都新宿区戸塚町  
1-104 TEL03-3202-8844 FAX03-  
5286-9801  
ki-fu-ml@list.waseda.jp

##### ◆同窓会組織 早稲田大学校友会による 取組み(以下1件)

##### ③『早稲田大学校友会 東日本大震災救援 金』

・説明等:  
被災された母校後輩学生ならびに校  
友の支援に半額ずつ活用させていた  
だきます。また、本救援金への協

力者にお名前を『早稲田学報』誌上  
等にて掲載予定です(お名前を「一  
報くたさった方のみ」。

・募集期間:  
二〇一一年三月二日～九月三〇日  
(金)※予定

・受付方法詳細HP・問合せ:  
[http://www.waseda.jp/alumni/20110317eq\\_relief.html](http://www.waseda.jp/alumni/20110317eq_relief.html)

早稲田大学校友会  
〒169-8050 東京都新宿区戸塚町  
1-104 TEL03-3202-8040 FAX03-  
3202-8129 alumni@list.waseda.jp  
以上

### ◆参考資料◆

母校早稲田大学では、このたびの震災  
での被災学生への学費減免・奨学金制度  
の用意、また震災ボランティアを考へて  
いる学生へのアドバイスなど、震災に関  
連する様々な対応・情報を発信していま  
す。

母校の対応・情報は、次のHPにて参  
照できますのでご参考まで紹介します。

『東日本大震災への本学の対応につい  
て』  
<http://www.waseda.jp/jp/em/gejei/index.html>

『WASEDA WEEKLY』四月三〇  
日号外「東日本大震災について」  
[http://www.waseda.jp/student/weekly/info/2011\\_saigai.pdf](http://www.waseda.jp/student/weekly/info/2011_saigai.pdf) (PDF)

日号外「東日本大震災について」  
[http://www.waseda.jp/student/weekly/info/2011\\_saigai.pdf](http://www.waseda.jp/student/weekly/info/2011_saigai.pdf) (PDF)

### 台湾の皆様への感謝

平成二十三年三月十四日  
交流協芸云 32321

三月十一日に日本東北地方で大地震が発生しました。この未曾有の地震によって多くの人命が失われ、甚大な被害が生じております。

このような事態に対して、馬英九総統を始め台湾の皆様から、大変暖かいお見舞いや御支援の申し出をいただいております。このことに対し、交流協会として、心より御礼申し上げます。

台湾当局からの一億台湾ドルのお見舞い金、緊急援助隊、緊急物資の提供等様々な支援をいただいております。今朝、まさに二十八名の緊急援助隊と緊急物資の第一陣が日本に向けて出発したところです。また、たくさんの方々からお見舞いのお電話や手紙をいただきました。花束を交流協会台北事務所の入りにそっと置いて行かれた方もおられました。その花束には「日本国民平和を祈り」と書いてありました。

日本は、菅直人・内閣総理大臣の下、未曾有の国難ともいふべき今回の地震に対し、我が国の国民一人一人の力を結集して、この地震がもたらした国難をしっかり乗り越えるべく、全身全霊で取り組む決意です。

台湾各界から寄せられた大変暖かいお見舞いや御支援は、大変勇気づけられることであり、改めて心から感謝申し上げます。

### 台湾紙に『ありがとう、台湾』の感謝広告が掲載される

五月三日、東日本大震災に向けての台湾からの支援に対し『ありがとう、台湾』の感謝の広告が、台湾紙・自由時報と聯合報の朝刊に掲載されました。

東日本大震災については、世界中から莫大な金額の義援金が集まっています。ことに、台湾からはお国の危機を救えと、百六十億円（五月二日現在）を超える募金が贈られました。ところが日本政府は先月、アメリカや中国など主要国の大手新聞には感謝広告を掲載したものの、世界で最も多くの義捐金を贈ってくれた台湾の新聞には、政治的な理由なのか掲載しませんでした。

このため、「日本（政府）が台湾にお礼をしないなら、日本国民でお礼をしよう。親切にされたらありがとうを伝えるのは人間として常識」という考えのもと、日本人女性デザイナー・木坂麻衣子さんが発起人となって『謝謝台湾計画』をスタートさせ、民間の有志が広告をだすための募金を呼びかけました。

募金は二千万円近く集まり、広告費の二百四十万円以外の残りは被災地の義援金として送ったということです。

詳細は次記②にて木坂さんのインタビュー模様が動画でご覧になれます。

<http://www.youtube.com/watch?v=TReygDed0>



### 仙台へ行ってきました

齋藤 晃 (昭和五〇年・商学部卒業)

出発した三月二四日は幸いにも朝六時に東北自動車道が開通し、ほぼ救援車両のみの通行でしたので、比較的短時間で目的地（仙台市宮城野区）へ到着することができました。ルートは、東北道・浦和・仙台南・仙台南部道路・仙台東部道路・仙台東（太白区から若林JCTを経由宮城野区に至る）と辿りました。

東部道路の右側（海側）は、松原まで果てしなく続く更地になっていました。農地も宅地も境がありません。仙台東で下りて入った産業道路も、右側には綺麗に空地が広がり、テレビやら軽自動車が

オブジェのように転がっていて、とてもシュールな光景でした。直ぐ渋滞が始まりましたが、これは給油待ちの列で、後で聞いたところによれば二〜三時間待つても給油してもらえないことが多かった由。仙台行の目的は、小生の勤務する会社の仙台支店が被災したため、①社員ならびに社員家族の被災状況把握、②情報通信インフラの復旧、③固定資産・商品等の被害金額確定、④今後の短期的な業務継続推進対応の策定、が主なもので、あと若干の救援物資（レトルト食品、前日の報道で水が売り切れたためお茶のペットボトル、衛生用品等）を持参。また現地ではガソリンの供給が受けられないことを想定し、HVカーを使用しました。ともあれ支店に到着し、所定の目的を二日で終わらせ帰京しましたので、他の場所に行く時間はありませんでしたが、それでも、当時見聞きしたことを以下。コンビニ、ファミレスは商品、食材の供給SCが断絶したため閉鎖（一部の店が外でテイクアウトをやっていました）。水道、電気は復旧しましたが、都市ガスがまだまだで、調理や風呂は望むまでもありません。温泉はあるけど、電車は止まりガソリンも不足しています。だから自転車が増えました。支援物資は宅配便の営業所止めで届きますが、個人名の場合伝票照会に二〜三時間かかるとのこと。小生にできるのは、先ず顔の見える連中の支援、それから広がることを期待しております。それと、被災者の話を聞くこと。被災者同士では体験を話し合うことがないので（共有体験ですから）。

# 平成狂歌

関口恒雄会員(昭和二十九年・文学部卒業の狂歌、その舌鋒いよいよ冴えわたり、止まるどころを知りません。それでは、お届けします。

台湾の訛りなつかしUNCHANに

スーベンレンかと問われつなすく

原発の事故のレベルは七に上げ

処理のレベルは一か八かで

くたばらぬしぶとい人のノウハウが

不良長寿とわかっちゃいても

美姉妹のこれ見よがしの胸の谷

英語に訳すとシリコンバレー

気の早い王室ファンの願望は

ダイアナに似た姫の誕生

# 台湾関連図書紹介

## 「昭和」を生きた台湾青年

日本に亡命した台湾独立運動者の回想1924・1949

王育徳／著 近藤明理  
／編集協力 草思社

台湾を駐在目的で初めて訪問してから、もうふた昔になる。戒厳令は既に解除されており、李登輝氏が故蔣経国総統の後継として正式に総統に就任されていたものの古き国民党強権の宿痾は残っており、まだまだ現役だった「日本語世代」から辺りを憚るような雰囲気の中、様々なお話を伺った。今回本書を拝読し、当時を思い出した。

著者の王育徳氏は日拠時代の大正十三年、古都・台南の裕福な商家に生まれ、日本教育を受けて育った台湾人。当時の台南には日本の社会制度とは別に清の文化や因習がまだ色濃く残っており、著者はその中で幼少期を過ごし、長じて旧制台北高校から東京帝大に進む。この幼少期のエピソードが興味深く、台湾人の進学熱、公学校の小学校に対するコンプレックス、本島人と内地人との確執などが目を引く。また、封建的遺風を含む当時の台湾独特の文化が詳しく描かれ、これも重要な記録と思われる。同級生に葉盛吉(楊威理)著「ある台湾知識人の悲劇」岩波同時代ライブラリー)の名前もあった。邱永漢も台南の出身だが、台北で初めて知り合ったらしい。

戦後の国民党軍進駐以降は悪夢の日々が続く。台南の学校で教壇に立っていた著者は、二・二八事件での公開銃殺、慕っていた兄・育霖の殺害を目的の当たりにして身の危険を感じ、先に香港に移住していた邱永漢を頼って亡命する。

その後日本に亡命して家族を呼び寄せ、大学教師を勤める傍ら台湾独立運動を始め、終生その活動に力を注ぐ。黄昭堂、許世權、周英明、宗像隆幸、金美齡、黄文雄らはこの当時のメンバー。また、台湾語研究で名高い言語学者としても活躍し、明治大学、東京外語大学他で教鞭を執った。

しかし、再び祖国の土を踏むことなく、昭和六〇年に逝去。著者は戦前に日本語で教育を受けた「日本語世代」の一人であり、本書は「日本語世代」が日本語で当時を詳しく語った貴重な記録といえよう。

台湾人元日本兵(中村輝夫・スニオン)補償問題との関係、政界に入る前の李登輝・台湾大学助教授の来訪を受け意気投合したなどの逸話も興味深い。

なお、編集協力了近藤明理氏は著者の次女で、ジョン・J. タシク Jr. / 編著「本当に「中国は一つ」なのか アメリカの中国・台湾政策の転換」(草思社)の共訳者。



### 鈴木歯科クリニック Suzuki Dental Clinic

東京都豊島区池袋4-25-1  
紘亜ビル1F 〒171-0014

Phone 03-5950-8241  
Fax 03-5950-8242

歯科医師／歯学博士

**鈴木章敬**

Akiyoshi Suzuki, D.D.S., Ph.D.

### タバコ 肥満は歯周病リスクを高めます

適切な口腔ケア(歯ブラシ・舌ブラシなど)で歯周病は予防できます！  
更に、カゼ、インフルエンザの予防になります！

### よく噛んで！ 歯周病予防と肥満予防！

口腔ケアで高齢要介護者の  
誤嚥性肺炎を予防しましょう！

# 年会費納入のお願い

先日、定期総会のご案内に同封し、二〇一一年度(2011年4月～2012年3月)年会費納入のお願いをお送りしました。大変お手数ではございますが、当会でお払い込み下さいませ様よろしくお願ひいたします。(振込料は各自ご負担でお願いいたします。)

なお既にお払い込み頂きました会員につきましては、重ねての催促をお詫び申し上げます。

## 記

- 一 お払い込みは、定期総会のご案内同封の「払込取扱票」(郵便局利用)をご利用下さい。
  - ① 郵便振替口座記号番号：00130-8-69805
  - ② 加入者名：日台稲門会
  - 二 銀行振込をご利用の方は以下の口座にお振込み下さい。
  - ① 銀行名：三井住友銀行 (銀行コード：0009)
  - ② 上岡支店：店番 566
  - ③ 口座番号：普通預金6929095
  - ④ 口座名義：日台稲門会 (イタノモリノカノ川村淳一 (カノムツヒコ、ムツヒコ))
  - 三 振込領収書をもって領収証に代えさせていただきますが、別に当会発行の領収証がご入用の場合は、振込取扱票にその旨をご記入下さい。
  - 四 ご不明の節は、神田携帯：090(7194) 1682(へ)連絡下さい。
- 以上

## 萬國專利商標事務所

当所は1972年に創立以来、企業団体、大学の学生団体に知的財産権についての教育と指導を続けると共に、特許・実用新案・意匠・商標出願依頼人に対して、電子、電気、半導体、ビジネスモデル、ソフトウェア、化学、医薬品、バイオ材料、機械、日用品等の各分野における発明・考案・意匠・商標の権利化を始め、知的財産関係の研究、相談など質の高いサービスを提供しております。皆様方の暖かいご指導、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

所長 陳昭誠 (弁理士・会計士)  
 副所長 洪武雄 (弁理士・技術士)  
 副所長 陳昭明 (2001年アジ研卒)

台湾台北市 10044 博愛路 35 号 9 階  
 TEL: 886-2-2381-7099 (代表)  
 FAX: 886-2-2331-7068・886-2-2389-1188  
 E-MAIL: info@iplouis.com  
 WEBSITE: www.louisipo.com

- メンバー：台湾弁理士会 (Taiwan Patent Attorney Association, TPA)
- 日本知的財産協会 (Japan Intellectual Property Association, JIPA)
- アジア弁理士協会 (Asian Patent Attorney Association, APAA)
- 国際商標協会 (International Trademark Association, INTA)
- 国際工業所有権保護協会 (International Association for the Protection of Industrial Property, AIPPI)
- 世界知的財産代理人連盟 (International Federation of Intellectual Property Attorneys, FICPI)
- 知的財産戦略ネットワーク (Intellectual Property Strategy Network, IPSN)

『萬國』は台湾登録商標

## 編集後記

本号は震災があつたことから当初の編集方針がガラッと変わり、特集号の様相を呈してしまいました。これも記録として残すための臨機応変の対応と、容赦願ひます。

まずはこの度の東日本大震災で被災された方々に対し、心よりお見舞ひ申し上げます。また、数多の支援、義捐金を賜りました台湾の皆様には深く感謝申し上げます。

拙宅にも地震直後から台湾知人からの安否確認が相次ぎ、果ては援助物資まで届きました。「東京はそれほどでもない」と説明したのですが、「お店が空になったとテレビで言っていたヨ」と大変心配され多謝、多謝の次第。

それにしても震災発生後すでに二か月を関し、地震、津波、原発災害それぞれについて検証、対応が進むと期待したのですが、活動家上りの経験の乏しい無知蒙昧な政治家による二次災害が広がっています。折角略奪のない日本、運命を受容し頑張る日本人という評価を世界で得ているのに台なしです。

しかし、個人と国の関係について国民一人一人が深く考える機会があつたことも事実で、世の中自分のことしか考えず社会に寄生する人間ばかりではないなと気を強くしました。被災地にはまっとうなボランティアが参集し、現地に迷惑をかけずに活動し帰って行くとのこと。マスコミも少しは見習って揚げ足取りは止め、建設的な意見を主張したら如何。東電との記者会見は頂けない。

また省エネ・節電が流行っていますが一過性で終わらないことを願っています。支援は息の長い作業、季節を問わず、倦まず弛まず続けましょう。ともあれ、震災地の早急な復旧・復興を祈念いたします。(齋藤晃)

WASEDA U 2011

祝・日台稲門会会報第14号発行

|  |   |  |  |
|--|---|--|--|
| <p>早稲田大学オープン教育センター講師<br/>早稲田大学台湾研究所客員研究員</p> <p><b>岩永康久</b></p> <p>〒120-0021 東京都新宿区早稲田鶴巻町五三二<br/>早稲田大学研究開発センター1201号館2号室<br/>電話03(6222)9060(内線9001-0)<br/>電話03(6222)9060(内線9001-0)</p>  | <p>早稲田大学校友会日台稲門会<br/>行政書士稲會<b>大嶋武</b></p> <p>〒352-0021<br/>埼玉県新座市あたみ三一一一一<br/>電話048(477)99974<br/>FAX048(477)99974<br/>携帯090(83003)99004</p>  | <p><b>小野間恒夫</b></p> <p>神奈川県茅ヶ崎市南湖五一五―五<br/>電話FAX0497(883)20011</p>   | <p><b>加藤博</b></p> <p>東京都小金井市<br/>貫井南町五一―四―一〇<br/>電話042(880)3673</p> <p>株式会社デジタルスケープ・<br/>宝塚造形芸術大学教授</p> <p><b>川村順一</b></p> <p>〒226-0006 横浜市緑区<br/>白山一―八―一―一〇八<br/>E-mail:kawamura1@ybb.ne.jp</p>   |
| <p>株式会社大和証券 アジア事業調査室<br/>主任研究員・次長</p> <p><b>川村淳一</b></p> <p>〒100-0783 東京都千代田区丸の内一―九―一<br/>電話03(5555)72006<br/>E-mail:junichi.kawamura@daiwas<br/>mbc.co.jp</p>   | <p>日台稲門会幹事</p> <p><b>神田正治</b></p> <p>E-mail:kanda0386@star.ocn.ne.jp</p>  | <p>日台稲門会幹事</p> <p><b>北村友雄</b></p> <p>〒231-0023 横浜市中区山下町九八番地<br/>551-1 山下町 516<br/>電話045(6081)76005<br/>E-mail:<br/>kitamura.tomoo@jcom.home.ne.jp</p>          | <p><b>輿石邦豊</b></p> <p>〒152-0002 東京都目黒区<br/>目黒本町二―一九―七<br/>電話FAX03(3710)16006<br/>携帯080(1137)44501<br/>E-mail:kn.koshishi@wing.ocn.ne.jp</p> <p>早稲田大学商議員<br/>横浜校友会顧問</p> <p><b>近藤良三郎</b></p> <p>〒222-0037 横浜市港北区<br/>大倉山五―七―一―五三〇<br/>電話FAX045(4544)75009</p> |
| <p>日台稲門会・稲門乗馬会</p> <p><b>齋藤晃</b></p> <p>東京都新宿区新宿六―二五―十五<br/>E-mail:akira_sjt@hotmail.com</p> <p>アジアブリッジ株式会社<br/>代表取締役社長</p> <p><b>阪根嘉苗</b></p> <p>〒141-0021 東京都品川区<br/>上大崎一―一〇―三四―四一九〇八<br/>E-mail:sakane@asian-bridge.com</p> | <p>日台稲門会幹事</p> <p><b>高橋徹</b></p> <p>E-mail:torutaka20@hotmail.com</p> <p>フランス・インターリミテッド<br/>(FrancesInterLimited)</p> <p><b>陳惠珍</b></p> <p>〒104-0013 東京都中野区<br/>弥生町二―三十一―十一 蒼苑ビル<br/>電話03-5328-8421 03-3229-0059<br/>FAX03-5328-8422<br/>http://www.msfraoces.com<br/>E-mail:chen@msfraoces.com</p> | <p>日台稲門会幹事</p> <p><b>萩原伸一</b></p> <p>E-mail:<br/>shin_hagiwara50@yahoo.co.jp</p>   | <p>日台稲門会幹事</p> <p><b>渡邊義典</b></p> <p>〒204-0021<br/>東京都清瀬市元町二―二六―二五<br/>E-mail:watanabe.yoshinori@mb.rnifty.com</p>   |
| <p>真鍋藤正税理士事務所<br/>高座日台交流の会副会長<br/>日台稲門会監査役</p> <p><b>真鍋藤正</b></p> <p>神奈川県大和市中央五―十三―五<br/>電話046(294)3050</p> <p>華隆機器工廠有限公司<br/>董事長<b>廖朝欽</b></p> <p>廠址<br/>台中市豊原市圓環北路二段三五九號<br/>電話04(222)38885</p>                              | <p>早稲田大学校友会<br/>日台稲門会</p> <p><b>渡邊光治</b></p> <p>千葉県市川市福栄四―一七―七<br/>電話047(399)2199</p>   | <p>早稲田大学台湾研究所</p> <p>〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町五三二<br/>早稲田大学研究開発センター1201号館401号室<br/>電話03(6222)9060(内線9001-0)<br/>FAX03(6222)9060<br/>E-mail:xxchiang@waseda.jp</p> | <p>早稲田大学台湾研究所</p> <p>〒162-0041 東京都新宿区早稲田鶴巻町五三二<br/>早稲田大学研究開発センター1201号館401号室<br/>電話03(6222)9060(内線9001-0)<br/>FAX03(6222)9060<br/>E-mail:xxchiang@waseda.jp</p>   |